



古代地域社会史研究の国際化をめぐって（フィールドレポート2）

古市，晃

(Citation)

Link : 地域・大学・文化 : 神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター年報, 17:143-148

(Issue Date)

2025-12

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100505422>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100505422>



Field ²
Reports

古代地域社会史研究の国際化をめぐって

古市 晃

*

二〇二四年一月一日、神戸大学大学院人文学研究科にて『播磨国風土記』の魅力の世界から発信する国際学術シンポジウム」が開催された。主催は兵庫県立歴史博物館ひょうご歴史研究室、及び坂江渉氏が代表を務める科研費による。共催は岡山大学文明動態学研究所と神戸大学大学院人文学研究科。シンポジウムは、兵庫県立博物館長兼ひょうご歴史研究室長・藪田貫氏による挨拶の後、同研究室・坂江渉氏「歴史学からみたパーマー氏の口承文芸論——『播磨国風土記』研究の新潮流——」、岩手大学・アンデス・カールキビスト氏（日本古代史）『『播磨国風土記』の英訳、Michiko Y. AokiとEdwina Palmer——佐比岡を中心に——」、神戸大学院生・ポール・ブラザートン氏（日本古代史）「パーマー氏による

英語版『『播磨国風土記』の古代史』と周辺国の古代史について」の三本の報告がなされ、その後、元ニュージールランド国立ウエリントン・ビクトリア大学・エドウィーナ・パーマー氏（日本文学・歴史学）によるリプライとコメントがあった。対面とオンラインによる開催で、パーマー氏はオンライン参加。多数の参加者を得て盛況のうちに終了した。

*

構成から明らかなように、このシンポジウムはニュージールランドに拠点を置くエドウィーナ・パーマー氏による『播磨国風土記』の英訳、及び『播磨国風土記』をめぐる近年の研究に関わる氏の近業の検討を目的として開催されたものである。ここでは三氏の報告の概要を紹介しておきたい。『播磨国風土記』の英訳は、一九九七年の Michiko Aoki氏による

ものがはじめてで、二〇一六年のパーマー氏訳はそれに続くものとされる。

坂江氏の報告では、このパーマー氏の訳業と合わせ、別に発表された『播磨国風土記』に関する論考⁽³⁾、及び神戸新聞に連載された同氏のコラムを検討の対象とした。坂江氏はパーマー氏が、『播磨国風土記』から、たとえば「みかた（御形）」の地名を「かたみ（形見）」から説明するような倒置的な用法（X式交差配列法。倒置対句法）や、麻打山の地名を「麻を朝に打つ山」という隠れた掛け言葉として配置されていることを指摘した点について、その口承性をはじめて見出したものと位置づける。さらに、古代ギリシャやイギリス・ロンドンの「コックニー押韻俗語」（Cockney rhyming slang）と比較することで、同風土記における言葉遊び、駄洒落の側面を指摘した点を高く評価している。またその翻訳がいわゆる直訳ではなく、パーマー氏の日本文学及び歴史学に関する深い素養に裏打ちされたものであること、ニュージーランドのマオリやオーストラリアのアボリジニー、北アメリカの西アパッチなどの事例を踏まえた人類学的洞察に到達していること、さらに複数回にわたって播磨の現地調査を行っている点などを合わせて評価している⁽⁵⁾。

カールキビスト氏の報告では、同風土記の揖保郡佐比岡条の両氏訳を中心に比較検討し、前者が日本古典文学大系から

刊行された秋本吉郎氏校訂のテキストを底本としているのに対し、後者は唯一の古写本とされる三条西家本に遡って検討を加え、さらに日本人研究者の研究を多く参照していることの徹底性を指摘し、その翻訳が正確（accurate）で読みやすい（readable）なものであるとしている。カールキビスト氏自身も『出雲国風土記』の英訳を手がけており、その経験に裏打ちされた評価であることを踏まえるならば、改めてその訳業の重要性を認識することができよう。その上で、カールキビスト氏は佐比丘条にみえる出雲御蔭大神やサヒの語義を鎌とみるなどの独自の見解を挙げつつ、パーマー氏訳からみえてくる今後の風土記研究の課題を論じている。

ブラザートン氏の報告でも、その口承性が取り上げられ、『播磨国風土記』に多くみえる地域間交流に関わる伝承を分析する際にも、その視点が有効であることが指摘された。その他、精度の高い翻訳と外国人に理解しやすい注釈によつて、『播磨国風土記』へのアクセスが容易になり、国際的研究の進展が期待できることも指摘されている。

＊

参加者の一人として若干の感想を述べておきたい。まずパーマー氏の訳業について、筆者の英語力では到底その全容

を理解することはできないものの、三氏の報告、及びパーマー氏のコメント等によるならば、本文の正確な翻訳であることに加え、その口承文芸性に焦点が当てられたことで、『播磨国風土記』の特徴がよりいつそう明確になったことが大きな意味を持つといえるだろう。他の風土記と比べて、『播磨国風土記』の素朴な文体は地域社会の実情をよく留めたものである可能性が指摘されてきた。こうした点も踏まえると、パーマー氏の指摘する口承文芸性とは、古代のいずれかの段階における播磨の地域社会の、地名起源を語る形でのコミュニケーションが存在したことを示すことになる。坂江氏は、このようなコミュニケーションの場合が地域社会の内部での結束を促すと共に、他者との関係においては地名の由来を語ることが服従につながるとの見方を示しているのだが、この指摘は示唆に富むものといえるだろう。筆者の関心に引きつけて恐縮だが、『播磨国風土記』の地名起源譚は決してパラレルに配置されているのではなく、宍粟郡に鎮座する伊和大神を頂点とする神統譜に組み込まれた神格と、丹波や但馬などの外部から侵入したとされる神格との対立という構図の下に成り立つ、政治的な秩序の存在を前提として理解できるものである^⑦。そうであるならば、地名起源譚が語られる場とは、どのような性格が想定されるのであろうか。坂江氏の提起に従うならば、そこには地域社会内部の人々による結束だけでな

く、外部の人々の参加があり、彼らに対する奉仕・服属の場としての性格をも有していたのではあるまいか。パーマー氏の訳業を通じて、古代播磨の地域社会をより具体的に復元する作業が必要であることを感じた。

もう一つの感想は、カールキビスト氏の報告に触発されたものである。氏の報告でとりわけ印象に残ったのは、佐比岡条にみえる出雲御蔭大神の神格の鎮座地を、『出雲国風土記』にみえる神門郡の陰山（現出雲市朝山町所在の山とする）とした点と、「丘Ⅱ岡」の語の共通性を通じて、播磨と出雲の関係を示唆した二点である。『出雲国風土記』には、陰山は（出雲）大神の御蔭とされているから、前者の比定は妥当であろう。そうであるならば、佐比岡にみえる出雲御蔭大神の伝承は、神門郡と播磨の揖保郡の勢力の間に何らかの結びつきが存在した可能性を示すものとなる。

「丘Ⅱ岡」の語の共通性とは、そのことを前提として、出雲の船岡（大原郡）に阿波から到来した阿波枳閉委奈佐比古命^{みこと}がみえることと、さらに『播磨国風土記』美囊郡志深里条に、阿波国の和那散^{わなさん}のシジミが現れたことで志深の地名が生まれたとする伝承を結びつけ、播磨と出雲の間の密接な関係を示唆したものである。

『播磨国風土記』には、佐比岡条以外にも出雲との関係を示す伝承が散見するから^⑧、播磨と出雲の関係が密接であった

ことは明らかであるが、和名佐（奈佐）は実際に阿波国那賀郡（後に海部郡）に所在した地名であり、阿波柁閑委奈佐比古命の伝承は、阿波の和名佐の人々が播磨を経由して出雲に到来していたことを示す⁹⁾。したがって、カールキビスト氏が示唆したこの事例は、直接には奈良時代以前における阿波の人々の出雲への移動を示す事例として解すべきである。ただその前提としての播磨と出雲の関係は、氏の指摘によっていっそう密接であったことが確実になったといえる。

＊

播磨や出雲といった、古代の地域社会をめぐる議論が、外国人研究者を交えつつ、詳細な議論に及んだことは、今後の古代地域社会史研究の進展を予期させるものとして、興味深いものであった。筆者の乏しい経験の中ではあるが、これまでの古代史をめぐる国際的な研究とは、たとえば正倉院文書や木簡といった、課題を共有しやすい史料をめぐる基礎的研究や、また国家体制や外交に関わるような、いうなれば「大文字の歴史」に関わる内容が多くを占めてきたように思う。一方で地域社会史研究は、どちらかといえばより専門的で目立たない分野として、国際的な議論の俎上に上ることは少なかったのではないか。しかしどのような権力や国家であって

も、それが現実に存在する地域社会との関係によって成り立つ存在である以上、地域社会の分析は国家論の基礎となるべきものであるし、何よりも人々の日常生活の舞台である地域社会の存在形態を明らかにすることは、歴史学の中で重要な課題であるに違いない。今回のシンポジウムには、『常陸国風土記』や肥前、豊後の西海道風土記のイタリア語訳を完成させたナポリ東洋大学・アントニオ・マニエリ氏の参加もあり、予想以上に幅広い関心を持って迎えられたことが窺えた。こうした課題意識が国際的に共有されて深められてゆくことで、古代史研究の方法論を取り巻く一種の「閉塞状況」を打破する機運が到来する可能性もあるだろう。

＊

最後に、今回のシンポジウムが開催されるに至った経緯について、簡単に触れておきたい。坂江氏の報告でも触れられていたように、パーマー氏と坂江氏、及び筆者らとの交流は二〇一六年に遡る。その前提には、坂江氏を中心とする『播磨国風土記』の共同研究の歴史があるが¹⁰⁾、パーマー氏との交流は、主に兵庫県立歴史博物館に設置されたひょうご歴史研究室を通じてのものであった。その間、二〇一九年にはパーマー氏の来日が実現し、播磨地域の巡見調査を実施した他、

二四年にはひょうご歴史研究室編『播磨国風土記』の古代史』(神戸新聞出版文化センター、二〇二一年)の中から三八篇の論文を選び、パーマー氏が英訳を完成させるなどの着実な成果が生まれていた。⁽²⁾ 今回のシンポジウムは、こうした一連の成果を受けて企画されたものである。

ひょうご歴史研究室は二〇一五年に設置され、『播磨国風土記』の他にも、古代大阪湾と淡路を中心とする研究、中世の赤松氏と山城を中心とする研究、中・近世のたたら製鉄研究を軸に着実な研究成果を挙げ、公開講座や出版物の形で広くその成果を市民に還元してきた。

ただその実態は単年度予算での運営という脆弱なものであり、事務局及び関係者の奔走によって多大な成果を挙げつつも、県政の転換の中で予算削減の対象となり、二〇二四年をもって閉鎖された。兵庫県を中心とする歴史文化遺産の調査・研究とその活用という観点から見た場合、近年これほどの成果を挙げた機関は見出しがたく、その損失はきわめて大きいといわねばならない。今回のシンポジウムの成果を振り返りつつ、明らかになった課題をどのように引き継いでゆくのか、困難な状況の下ではあるが考えてゆきたい。

註

(一) Aoki, Michiko Y. 1997. Records of wind and earth: a

translation of Fudoki with introduction and commentaries.

Ann Arbor: Association for Asian Studies.

(2) Palmer, Edwina. 2016. Harima fudoki: a record of ancient Japan reinterpreted, translated, annotated and with commentary. Leiden: Brill.

(3) パーマー「口承文学としての風土記——播磨国風土記にあらわれる「麻打山」の新解釈——」(『風土記研究』三二、二〇〇八年)、「風土記読解——口承文学の観点から——」(『文学』五四一七、二〇〇九年)。

(4) 二〇二四年八月二二～二四日同紙「パーマーさんが読み解く播磨国風土記」一～四。

(5) 坂江氏のパーマー氏評については、坂江氏『播磨国風土記』の資料的価値——口承の世界——(ひょうご歴史研究室編『播磨国風土記』の古代史)(神戸新聞総合出版センター、二〇二一年)も参照。

(6) Carlgvist, Anders. 2009-25. Izumo fudoki Part I ~ VIII. 『出雲古代史研究』19 ~ 35 (断続的に掲載)。

(7) 拙稿「古代播磨の地域社会構造——播磨国風土記を中心に——」(拙著『国家形成期の王宮と地域社会——記紀・風土記の再解釈——』塙書房、二〇一九年、初出二〇一四年)。

(8) 賀古郡条にみえる出雲臣比須良比売、揖保郡上岡里条にみえる出雲国阿菩大神、同郡日下部里条にみえる出雲の土師弩美宿禰、同郡枚方里条にみえる出雲大神、同郡桑原里条にみえる、琴坂における出雲の人、讃容郡柏原里条にみえる出雲国からの大神の到来の伝承など、佐比岡条以外に六例がみえる。

(9) 拙稿「ワナサとミマツヒコ——国家形成期における海人集団の動向——」(木本好信編『古代史論聚』岩田書院、二〇二〇年)。

-
- (10) Manieri, Antonio. 2013. Hitachi no Kuni Fudoki: Cronaca della di Hitachi e dei suoi costumi. Roma: Carocci. Manieri, Antonio. 2022. Cronache del Saikaido. Roma: Carocci.
- (11) 新宮町史編集専門委員会『播磨新宮町史 史料編』一（兵庫県新宮町、二〇〇五年）、坂江渉編『風土記からみる古代の播磨』（神戸新聞総合出版センター、二〇〇七年）、香寺町史編集委員会編『香寺町史 村の歴史 通史編』（姫路市、二〇一一年）、同編『神戸・阪神間の古代史』（神戸新聞総合出版センター、二〇一一年）、前掲『『播磨国風土記』の古代史』など。
- (12) 兵庫県立歴史博物館のホームページで閲覧可能(https://rekihaku.pref.hyogo.lg.jp/digital_museum/harimanokunifudoki/english/)。